

探検と開拓の先駆者 笹森儀助 さくもりぎすけ

牛飼うしかい儀助——と呼ばれた笹森儀助が、故郷弘前を離れて、遠く千島に、琉球に、さらに台湾、シベリアにと、漂泊ひょうはくの旅を続けたのは、単なる冒険心からではなかった。

明治という新時代を迎え、弘前の旧藩士たちは、時代の流れに即応そくおうできずに、徒食としよくの日々を過すごしていた。それを救おうと、「農牧社」を作って、開拓事業に力をそそいだのが儀助であった。だが、その思うにまかせぬなりゆきに、なんとかこれを打破したいものと、その目を外へ向けたのが、彼の大旅行であった。

未開の新天地を、自分の目で確かめ、そこから、日本の新しい農業を樹立しようという雄大な構想が、彼の大旅行に秘められていたのである。

笹森儀助は一八四五年（弘化二）一月二十五日、陸奥国むつのに弘前在府町に父重吉、母ひさの長男として生まれた。ほかに弟栄吉がいる。父笹森重吉は、弘前藩士、家禄百石で御目付役をつとめていた。

生家は今の在府町木村産業研究所のすじ向かいあたりで、近くにのちに陸羯南くがかつなんとなった中田実なかたみのるの生家があった。儀助は羯南より十二歳年

長であったが、二人の間には交流があった。のちに儀助が行った千島探検旅行も、羯南の助言によって調査方法などが決定されたという。

一八五七年（安政四）儀助が十三歳のとき、もともと病弱だった父重吉が病死した。家督をついだ儀助は、ただちに小姓組として出仕した。

儀助も亡父に似て、病弱な体質であったが、母の励ましと、自らの強い意志をもって鍛え、ついに強靱な身体を作り上げることができた。

母ひさは、五所川原の石郷岡家の出であったが、慈愛にあふれた中にも、強い意志をもって儀助を育てた。

後年、儀助は『貧旅行之記』と題する自分の本に、「わたしは生まれつき身体が弱く、いつも病氣ばかりしていた。そのうえ早く父に死なれたので、ひたすら慈母の教訓に従って、健康に成長することができた。ただ幼小の頃、死をもって国君に仕えなさい、と教えた母の言葉は、忘れることができない」と書いている。この儀助の言葉から、母ひさがどのように儀助を育てたか、容易に想像できよう。

だが、儀助は十九歳でこの母とも死別し、弟栄吉と二人とり残される。肉親愛に恵まれなかったというべきで、このような生い立ちが、後年の漂泊の旅の遠因とも考えられる。

儀助は十五歳の時から二十二歳まで同藩の山田登<sup>のぼる</sup>について武芸を修めた。また藩校稽古館に学び、のちに工藤他山、葛西音弥について皇漢学を修めた。だが、儀助が最も深く影響を受けた師は、山田登であった。

山田登は一八二一年（文政四）に生まれ、儀助より二十四歳年長であった。幼名を又一郎といい、宇佐美家の出であったが、梶派一刀流師

範山田登の養子となり、養父の死去によつて襲名すると共に、師範職についた。一八六〇年（万延元）勘定奉行から御用人役に進んだ。登は単なる武芸者ではなく、熱烈な警世家けいせいであり、急進的な実践家でもあった。

登は外国船が渡来する騒然たる中で、北辺の武備を強化するためには、国力の充実が第一だとして、新田開発を進めるといふ政策家でもあった。また北海道の防備は、力の弱い松前藩にまかせてはおけないといつて、藩重役に無断で、松前を弘前藩の支配下に置くべきだといふ献策を近衛公に送つたりした。さらに明治にはいつてからも、弘前藩に不正があると政府に訴え出て、かえつて自分が罰せられたり、登はその生涯に大きな事件を四回も引き起こした人物だった。

このように急進的で、独善的ともいえる山田登の生き方は、儀助に大きな影響を与えた。「みずから反して正しからば、千万人といえどもわれゆかん」という一徹な精神は、儀助がこの師から感化された唯一無二のものであったかも知れない。一八六七年（慶応三）、登の指導で、儀助とやはり登の門下生菊池平太は、連名で国政改革の意見書を藩主に提出した。その意見書が藩主の怒りにふれ、三人は蟄居謹慎ちつきよを命ぜられ、家禄を三分の一に減らされた。儀助が蟄居謹慎を許されたのは三年後の一八七〇年（明治三）、それも新政府の手によつてであつた。許されると同時に有能な若手士族だった儀助は、弘前藩庁の権少属租税係ごんに採用された。

翌一八七一年（明治四）七月廃藩置県となり、儀助は樋口小三郎と共に、弘前城を新政府に引きわたす引き継ぎ役をした。同年九月青森県

設置、儀助は青森県弘前支庁十四等出仕となった。

明治新政府は、維新に功績があつた薩長土肥（薩摩―鹿児島、長州―山口、土佐―高知、肥前―佐賀）の藩閥出身者が行政の中心になつていた。それは地方政治も例外でなかつた。県知事、郡長といった高い地位は、ほとんど彼らによつて占められて、地元の間人は割りこむ隙もなく、したがつて地元の声が政治に反映することも、ほとんどなかつたのである。

そのような中で、儀助は十四等出仕を振り出しに、第六大区（下北郡）副区長、区長となり、さらに第三大区（弘前、中津軽郡）区長となり、明治十一年区制が廃止され郡制がしかれると、初代の中津軽郡長となった。まずは順調な出世コースを歩んだことになる。

だが、儀助にとつて、役人の毎日は決して楽しいものではなかつた。区長だ、郡長だといつても、つまりは一介の地方官僚にすぎない。中央の圧力に対抗する力もなく、ただ一方的にその命令に従うだけである。これは土地の人々の幸福を願う儀助にとつて、耐えきれないことだつた。

しかも一八七三年（明治六）の地租改正では、農民たちは藩政時代の税より、はるかに高い地租を払わねばならなかつた。また、官民有土地区分事業では、青森県内の多くの山林が、国有林に編入されて、伝統的な山村民らの権利が奪われる結果となつた。つまり、これまで山村に住むものに与えられていた山林内の山菜の採取や、山林の下枝の薪採取などの権利が、国有林となつたために奪われてしまい、山村民の

生活をいつそう苦しくさせたのである。

儀助はこの政府の施策に猛烈に反対し、建白書を書いたりしたが、その反対は決して反政府的なものではなかった。彼自身が言うように、「苦心唯ただ民権保護の一点に止るとしま」程度であった。儀助は激しい性格の持主ではあったが、保守主義者であり、政策に猛反対でも、反政府的行動は絶対にとらなかった。

だから、弘前の昔をなつかしむ旧士族たちが、こぞって自由民権運動に走ったときでも、儀助だけは、新しい秩序を肯定し、自分の意見を述べただけ述べて、新政府の中に、自分を生かす方法をとった。

しかし、儀助は一八八一年（明治十四）十一月にいたって、中津軽郡長を辞任した。弘前事件といわれる政治的混乱に際して、官僚生活にいや気がさしたからだという。弘前事件というのは、国会開設の詔勅がもとで、県知事をはさんで、弘前の民権派と保守派が対立した政治事件である。

郡長を辞任した儀助は、翌十五年五月、農牧社のうぼくしゃを開設した。政府から借りた四百三十町歩の土地をもとに、畜産、畑作、林業の経営に従事したのである。農場は岩木山ろく常盤野にあって、政府からは勸業資金一万七千円が貸与された。

この事業の中で、目新しかったのは乳牛の導入だった。儀助が牛飼いだといわれたのもそのためである。しかし、せっかく牛乳をしぼっ

ても、弘前地方では飲むものがなく、牛を東京にひいて行って、牛乳を販売するという苦肉の策をとらねばならなかった。農牧社の経営は苦しく、その中であって儀助は、月給もろくにもらわず奮闘した。また農場に働く牧夫の給料も減額して、全く背水の陣をしいて経営に没頭した。儀助は一八八六年（明治十九）から農牧社社長に就任していたが、経営がようやく軌道に乗り出した二十五年に辞任した。実業家としての道も、儀助にとって満足すべきものでなかったのである。

ただ、農牧社時代の儀助のもとで、牧夫をしながら、その経営の才を学びとった一人に、「りんごの神様」といわれる外崎嘉七がいた。六年間儀助と起居を共にした嘉七は、儀助が抱いていた祖国への忠誠、儀助が身につけていた調査観察力と果敢な実行力、あくまでも物事をなしとげようとする信念などを、自分の身につけたのである。一九〇八年（明治四十二）九月、時の東宮殿下（大正天皇）が嘉七の経営する向陽園に行啓され、嘉七たちのりんご産業を激励された。感激した嘉七は、岩木山麓の巨石で行啓記念碑を建立したが、このような光栄は、すべて儀助の薫陶くんとうがもたらしたからだと語り、記念碑の前に儀助の肖像画を飾って神酒を捧げ、皇恩と師恩に感謝した。まさに美しい師弟愛というべきであろう。

一八九一年（明治二十四）、儀助は彼のいう「貧旅行」に旅立った。農牧社時代に、節約を重ねたすえ、貯金が二百円ほどになったので、これを資金に、近畿、中国、九州を、二ヶ月に渡って巡り歩いた。儀助は各地で篤農家を訪問し、その苦心談を参考にしようとしたが、どこ

でも耳にしたのは、人びとの時勢に対する不満であった。それによって儀助は、二十三年に中央政府が行った地価修正論が、現実に即応しないことを確認させられた。彼はこの旅行で、大隈重信に爆裂談を投げつけた来島恒喜くるしまつねきや、森有礼ありのりを刺殺した西野文太郎の遺族を慰問しているが、これは彼の愛国主義が、しだいに超国家主義に傾いてきていることを物語るものであろう。

こうして儀助は、いったんは弘前に戻ったが、次は北海道へ行きたいと思っていた。ちょうどその時、千島へ探検艦を派遣する話を聞いた儀助は、さっそくこの話に飛びつき、便乗させてもらうことになった。

千島にいたのは、一八九二年（明治二十五）八月一日から約一ヶ月だったが、儀助はこの間、千島の交通、産物、風俗、言語、伝説と多方面にわたって調査をしている。これは同郷の後輩であり、ジャーナリストとして知られた陸羯南の助言によったものであった。

この見聞記を、儀助は、『千島探験』としてまとめ、翌二十六年自費出版した。その意図は、千島の開拓を推進し、日本の国防のための最前線基地にしたいということにあった。探検者としての情熱が高まるにつれて、儀助は自分の仕事は、広く国威の伸長に役立つと考えるようになった。儀助は国士としての自分を自覚する。だから『千島探験』が、井上毅によって明治天皇の天覧に供せられたとき、儀助の感激はひとしおのものがあつた。彼はそのときの心境を「乙夜おつやノ覽ニ供スルノ光荣ヲ得タリ、予ガ子孫タルモノ是ニ鑑かんがミテ、世々勤王ノ精神ヲ墮たサザランコトヲ要望ス」と記している。

これに続いての琉球探検が、前にもまして熱がこもったのは、ごく自然のなりゆきだった。北辺に比べて、南境の開拓が遅れていることを憂い、その存在を広く世に知らせようと、儀助は生死をかけて琉球探検を決行する。

一八九三年（明治二十六）六月一日、那覇に上陸してから、足かけ五ヶ月にわたり、儀助は琉球五十余島のすみずみまで踏破した。ハンセン病や風土病に苦しむ住民たちの生活もじかに確かめ、その実情を事細かに記録しているが、儀助が、庶民の生活そのものに、深い関心を示し、観察記録したことが、のちに日本の民俗学にとって貴重なものとなる。儀助の記録自体、学問的でなくても彼の目と根気が、一つのを体系立ててみせたのである。民俗学者、歴史学者として名高い柳田国男が、儀助の旅行記『南東探検』（明治二十七年自費出版）を読んで「不世出の大旅客」と讃えたが、このことから、儀助の南東旅行が、どんなに学問的価値があったかがわかるであろう。

だが儀助は実践家というより、理想に生きようとする啓蒙家であった。それにもかかわらず、彼は自分の夢を、自分で実現しようと、たびたび試みた。彼が奄美大島の島司となったのも、その一例である。一八九四年（明治二十七）八月、南東探検の功により、儀助は高等官七等になり奄美大島の島司に任命された。彼は鹿児島人から蔑視されている島民の味方になって、その生活向上につとめた。島司として四年間在島したが、その間、台湾へ出かけて、農業を調査し、それを参考に奄美大島の開拓を推進した。それだけの熱意を注いだので、儀助の開墾事業は、島民に多くの農地をもたらした。だが、それだけの功績がありながら、挫折するのは、島民側に立ちすぎて、鹿児島県庁と対立したか

らであった。そのような駆け引きのなさが、儀助に一つのことを成しとげさせなかった原因となった。

奄美大島島司を辞任した儀助は、一八九九年（明治三十二）五月陸羯南の推薦で、朝鮮咸鏡道かんきやうじやうに開設された北韓学堂ほくかんの堂長となり、二年間在任した。その間、三十二年九月、二十日間のシベリア旅行を試みたが、北韓学堂の廃校によって三十四年帰国、翌三十五年青森市第二代市長に就任した。

弘前図書館発行『郷土の先人を語る』(1)の「笹森儀助」の中で、著者の斎藤康司氏は、儀助の生涯を時期的に区切って、「地方役人時代十年、事業家時代十年、探検家時代三年、行政家時代十年、晩年の十二年」といい、「そのどの時代をとって見ても、儀助には得意と自認する時代はなかった」といつている。

その得意と自認する時代がなかったことが、むしろ儀助の偉大さを物語るものではなからうか。ひと口にいえば儀助の生涯は、自分の夢を追い、その夢とのたたかいであった。それだけに、儀助は純粹に生きたのである。そして、その夢を追い求める純粹さが、彼の探検旅行では、尖光せんこうのような花を咲かせたのである。

儀助が四十五年間も連れ添った妻いくとの間には、三男四女があつたが、彼は家をかえりみることも、ほとんどなかった。財産とてなく、わずかな金もその探求心のため使ってしまったのである。四人の娘のうち三人までが、独身のまま世を去つたというのも、ものの哀れを感じ

させる。一家は儀助の夢の犠牲になったとさえ言える。

一九〇八年（明治四十一年）、青森市長を辞任したあと、六十四歳の儀助は、四女はまが勤務する大阪の病院の会計監査となったが、これも一家の生活費を得るためだったろう。しかし同じ年に、はまが病死したため、彼はまた弘前に戻らねばならなかった。生涯不本意なことばかり多かった儀助は、晩年においても孤独で不遇だった。

一九一五年（大正四）九月二十九日、儀助は死去した。行年七十一歳。鍛冶町の銭湯で倒れ、医師伊東重が駆けつけて手当てあてをしたが、ついに意識を回復せず、眠ったまま息を引き取った。

妻いくは、夫儀助の奔放な生き方に、ひとことのぐちもこぼさず、死に水をとったという。その葬式は、儀助の逆境に似ぬ盛大さで、自宅から新寺町西光寺まで、見送りの行列が延々と続いたといわれている。夢を追い続けた執念の男の心意気が、弘前の人びとの心をはげしく打っていたからであろう。

#### 参考文献

横山武夫『笹森儀助翁伝』一九三四年（昭和九）青森今泉書店

斎藤康司『笹森儀助』「郷土の先人を語る(1)」一九六三年（昭和三十八）弘前市立図書館

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一四・二三頁